

1 はじめに

今年度担任したなかよし学級 2 組は、1、2、4 年生 8 名が在籍する自閉・情緒特別支援学級である。本報告は 2 年生男子児童 2 名について行う。2 名は双子で、ADHD と ASD の診断がある。昨年度途中から授業逸脱行動があり、昨年度 3 学期の交流学級での授業参加は 15 分間であった。今年度 4 月は教師に対する暴言・暴力が顕著で、学習ができる状態ではなかったが、「環境が変わったことへの不安が、このような不適切な言動で表れている」と理解して指導に当たった。

2 取組

(1) 実態把握

まず初めに取り組んだことは実態把握である。4 月初、2 名は基本的に教室におらず、校内を走り回っていた。教室に戻ってきてもロッカーの上で過ごし、鉛筆を持つという一切なかった。そこで、「先生と仲良くなろう！」という単元を毎日 1 時間目に設定し、教師と一緒に体を動かす時間とした。その中で 2 人の得意なことや苦手なこと等を観察した。この期間の実態把握では、集団の苦手さや学習経験の少なさ、聴覚過敏や体幹の弱さ、集中時間等、それぞれの特性が見えてきた。

(2) UD の授業づくり

実態把握と共に UD の授業づくりの取組を始めた。

【教室環境の工夫】

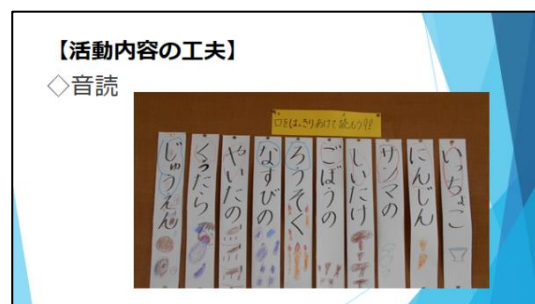
危険なものは移動させ、ロッカーや棚にラベルを貼って片付けがしやすい環境にした。また「いすにすわりましょう」、「ここは開けません」というラベルを貼って、毎日指導を続けた。また登校した後、することの手順を視覚化して毎日一緒に片付けの練習をした。ASD の特性も考慮して一日の流れや一週間の予定も一緒に確認するようにし、見通しを持って、安心した学校生活を送れるようにした。

【情報伝達の工夫】

不注意の特性があることを考慮して、説明する際にも「簡潔に・視覚化して・一つずつ」伝えるようにした。

【活動内容の工夫】

学習に向かうきっかけとなったのは「詩の音読」だった。学習経験が少なく、鉛筆も持たない状態であったため、「2 人ができること・得意なこと」は何かという視点で考えた。2 人は大きな声を出すのは得意である。この声を生かして、短い詩であれば読めるのではないかと考えた。平仮名ばかりの詩を 2 人は気に入り、何度も練習をするようになった。

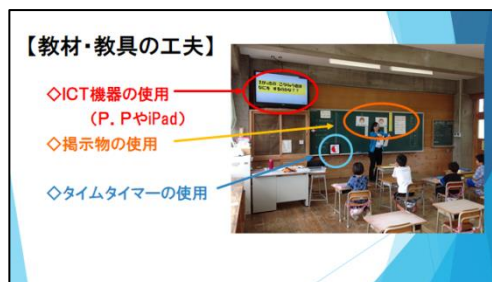


【教材・教具の工夫】

授業では iPad やタイムタイマー、掲示物を使用した。教科書を読むときに動画を撮って振り返ったり、聴覚過敏に配慮して掲示物を準備したりすることで、児童が授業に参加しやすい授業づくりをした。ゴールが分かることで安心できるため、タイムタイマーの使用や授業の流れの掲示は効果的だった。

【評価の工夫】

学校生活全般で即時評価を心がけ、良い行動はその時すぐに認め褒めるようにした。また宿題ができた、掃除ができた、授業を受けた、というような頑張りがあったときにご褒美シールを渡してカードに貯めていくようにした。シールを 30 枚集めてカード 1 枚達成すると、宿題が 1 日休みになるというご褒美は今も効いている。



3 成果と課題

3 学期を迎えた今、2 名は集団参加の場面も増え、交流学級の学習を主として学校生活を送るようになった。縦割り班掃除や学校行事等にも参加し、通常の学校生活を送っている。休み時には交流学級の児童と一緒に遊ぶ姿も見られ、人との関わりも、2 人だけの世界から友達や先生へと広がっている。学習についても、ノートテイクや発表、テスト等周りの児童と同じようにできるようになった。しかし、新しい場面には事前の説明や心構えが必要なことが多々ある。3 学期は、環境が大きく変わる 4 月の進級に向け、環境の変化に 2 人が対応できるような手立てを講じる必要があると考えられる。

4 考察

今回の実践では、実態把握をして得意なところから学習を始め、特性に応じた分かりやすい支援を継続して行ったことが児童の「できる・わかる」という自信になり、良い変化につながったのではないかと考えられる。また、なかよし学級の取り組みだけではなく、交流学級の授業のUD 化や教職員の児童理解、引きつぎ事項の再確認や支援員との連携等、学校生活の中の様々な取組や関わりが児童の情緒の安定につながったと考えられる。

5 おわりに

本年度、初めて自閉症・情緒障害特別支援学級の担任となり 8 名の児童と学習する中で、実態把握や特性を理解することの重要性を痛感した。そして、実態把握に基づき一人ひとりの特性に応じた支援を行うことで、児童の姿が肯定的に変化することを、実践を通して理解できた。また、所属する交流学級の授業などが UD 化され、安心して学習ができる場となったことも、児童が変化した大きな要素の 1 つだと考えられる。交流学級の受け入れ方や授業の在り方が児童の肯定的な変化に影響するため、今後は、特別支援学級と交流学級の連携について研究を進めていきたい。

